

企画展「古墳時代の馬の装い

ーさきたまに馬がやってきた!ー」の記録

岡本 健一

はじめに

平成9年10月14日(火)から12月7日(日)まで、県立さきたま資料館では、将軍山古墳整備事業完成記念企画展「古墳時代の馬の装いーさきたまに馬がやってきた!ー」を開催した。私にとっては初めての本格的な企画展で、わからないことも多々あったが、多くの方々の御協力でなんとか無事開催することができた。この企画展では、古墳時代の馬具を中心に展示を行い、当時の馬文化について理解をしてもらおう一方、本物の馬を登場させて馬具の複製品をつけ、さらにその馬に乗ってもらうという、前代未聞のイベントまで飛び出した。会期中の約3万人の入館者からは、概ね好評であった。

本稿では、準備から資料搬出までの慌ただしかった毎日をふりかえり、反省の念もこめながら、この企画展の意義と今後への課題について、報告方々記しておきたい。また、出品を快諾いただいた各機関や、佐島牧場に深く感謝いたします。

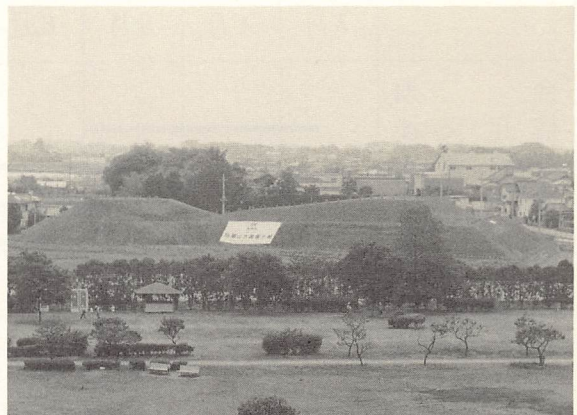
1 企画展の開催に至るまで

埼玉将軍山古墳は1894年に地元の人々によって発掘され、後円部の横穴式石室からは多くの遺物が出土したことで古くから知られていた。その後、墳丘の半分以上が失われて、崖面などの崩壊が危惧されていたことから、平成4年度より保存修理と古墳の活用の両面から整備事業を開始し、平成8年度に完成した。

墳丘や堀はできる限りの範囲で復元を行い、墳丘上には埴輪の複製品を並べて、当時の偉容を再現した。また後円部には、墳丘の欠損した部分を補完する形で「将軍山古墳展示館」を建設し、埋葬当時のようすをイメージした石室をそのまま公開し、古墳についてのガイダンスを行うようにした。このユニークな手法は全国的にも注目され、開館を待ち望む声が増し高くなっていった。

このような情勢のなかで、将軍山古墳の整備事業が完成した記念に、企画展を開催しようという意見が生じてくるのは、自然ななりゆきだったと言えるだろう。

将軍山古墳の副葬品の中で、全国でも出土例が少ない馬冑や旗ざおを含めた馬具類は、この古墳の特異性を示すものとされている。企画の段階で作成した開催要項には、開催趣旨について次のように記した。



完成した将軍山古墳整備事業

史跡埼玉古墳群の将軍山古墳に展示館を建設したのを記念して、将軍山古墳の出土品で特に注目される馬具にスポットを当てて展示を行う。

馬に乗る風習は、古墳時代になって大陸からもたらされたもので、きらびやかな馬具は権力の象徴であるとともに、当時の金工技術の最先端を示すものである。埼玉古墳群では稲荷山古墳と将軍山古墳から優れた馬具が出土しているが、馬との関わりが希薄な現代人にとっては難解な資料である。そこでこれらの古墳の馬具の解説を基本にして、埼玉県内外の馬具だけにとどまらず、馬にまつわるさまざまな資料を展示することにより、馬と人とのつきあいの始まりの様子を再現しようとするものである。

平成9年4月29日、ついに将軍山古墳展示館がオープンし、連日大勢の人々でにぎわうこととなったのである。

企画展開催までの日程は、表1のとおりである。企画展の準備を開始したのは、もう3月も終わる頃であったが、4月には将軍山古墳展示館の開館準備もあって、なかなか軌道に乗ることはできなかった。5月に入って、やっと本格的に出品交渉や資料調査を始めたのである。結果的には、各機関の御厚意があって、ほぼ順調に進んでいったのであるが、やはり早めに準備を開始するに越したことはなかりう。

7月には学芸員実習の担当（実習生が行う古代劇の脚本、演出、主演の3役をこなさなければならない）のため、一時企画展準備も停滞したが、なんとか開催までこぎつけることができた。とくに田中学芸員の献身的な(?)協力のお陰で、ポスターや招待券などの印刷や資料展示作業などが滞りなく進んだことに、深く感謝したい。なお、この時期には後述するように、複製馬具や本物の馬の借用などの諸事もあり、多忙を極めたことは言うまでもない。

10月14日、かくして企画展「古墳時代の馬の装いーさきたまに馬がやってきた！」は盛大に開幕したのであった。

企画展「古墳時代の馬の装いーさきたまに馬がやってきた！」にむけて

	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
会 期								—————	—————	—————
借 用 交 渉	—————	—————							
資 料 調 査			—————	—————						
資 料 写 真 撮 影			—————	—————						
図 録 作 成				—————	—————	—————	—————			
ポスター・招待券							—————			
展 示 設 計				—————	—————	—————			
展 示 工 事								—		—
資 料 搬 出 入								—————		—————
複 製 馬 具 作 成				—————	—————	—————	—————			



梱包風景



展示作業風景

ポスター

2 展示の内容

【展示の構成】

開催趣旨で述べたように、今回の企画展では古墳時代の馬の文化について、わかりやすく展示することを第一に考えた。馬具だけではなく、その背景にある馬文化全般にわたって理解してもらうような展示をめざして、次のようなストーリーを組んだ。

序 日本に馬がやってきた！

現代では特別な存在になってしまった馬。しかしつい最近まではごく身近な動物だった。その馬がいつ日本にやってきたのか。どんな馬だったのか。素朴な疑問から出発して、古墳時代の馬の世界へ、入館者を誘っていく。

I さきたま古墳群出土の馬具 - 稲荷山古墳と将軍山古墳 -

埼玉古墳群のうち、稲荷山古墳と将軍山古墳からは見事な馬具が出土している。それは古墳時代にこのさきたまにも馬がやってきた証拠。身近な遺物から、馬に対する興味を喚起する。

II 馬を飼う人々

馬がやってきたからには、馬を飼う人々もいたはず。大阪で見つかった馬飼集団の遺跡を中心に、馬飼いの人々のくらしにスポットをあてる。

III 古墳時代の馬の造形

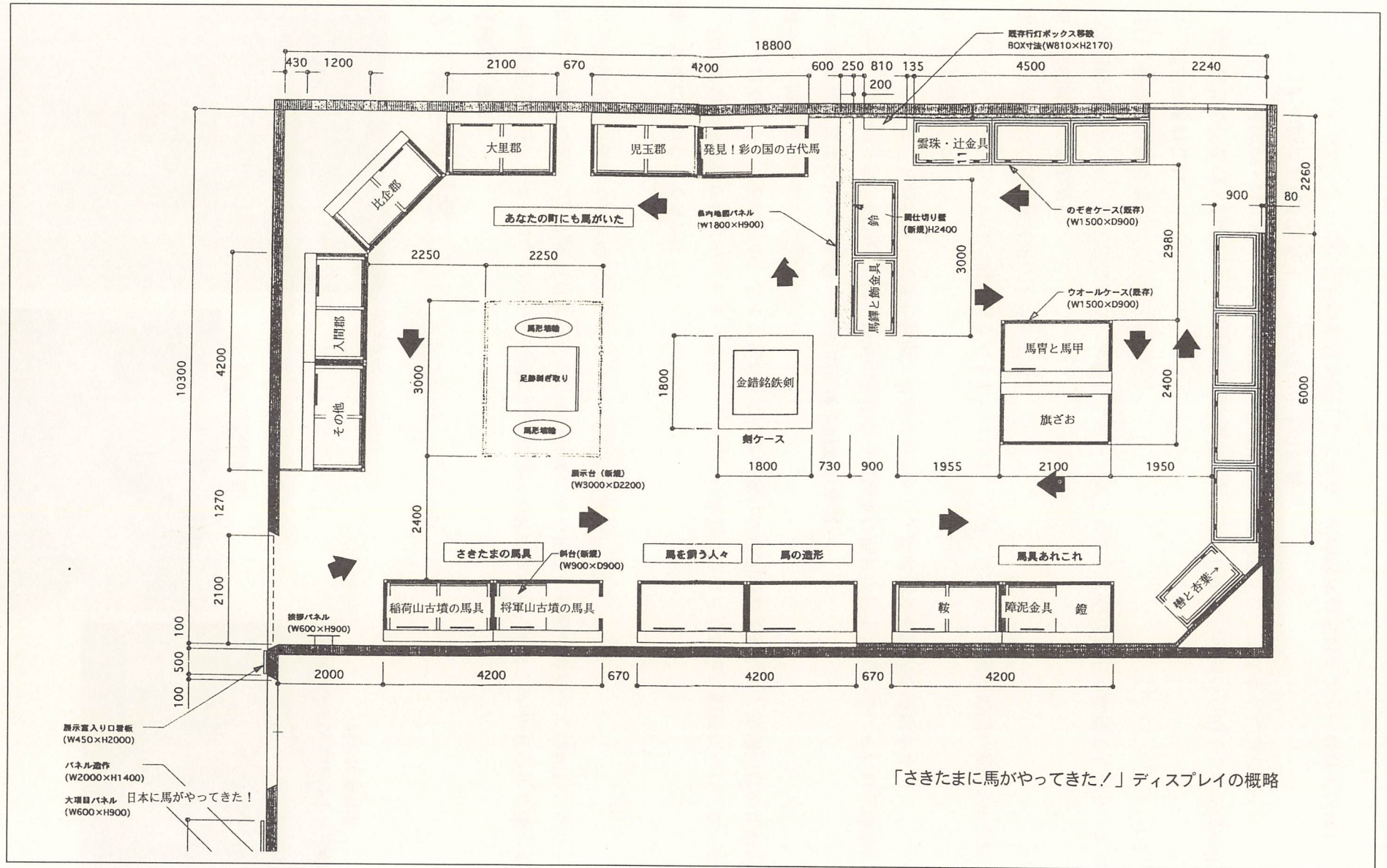
古墳時代の人々が、馬をどのように表現したのか。彼らにとって馬は権力の象徴でもあり、また憧れの動物でもあった。

IV 馬具のあれこれ

後期古墳の代表的な副葬品で、馬の文化を最も端的に表すのが馬具。全国から出土した古墳時代の馬具を、種類別・時代別に並べる。当時の金工技術の水準の高さは、現代をしのぐ。

V あなたの町にも馬がきた！ - 埼玉県内出土の馬具 -

埼玉県内からも、こんなに多くの馬具が出土している。古墳時代の馬具をより一層身近に感じてほしい。



当資料館の入館者を見ると、約半数を小学生が占めており、また考古学にはそれほど興味がなくても、古墳公園に遊びにきたついでに立ち寄っていく人も多い。逆に古代史のメッカとして、遠くからわざわざ展示を見に足を運んでくれる人も多いのが事実である。従って、さまざまなニーズに応えるような展示パネルが必要なのであるが、今回は試みに2種類のパネルを作成することにした。一つは一般向きの「教科書的」な文体のもの、もう一つは、一層かみくだいた文体のもの（バグジー君というキャラクターに語らせる形の、「おしえて！バグジー君」シリーズ）である。後者だけを読んでも展示内容が理解できるように留意している。なお、さらに詳しく知りたい人には、展示図録をお薦めした。

資料に付けるキャプションは、機能別に地色を分けて作成してみた。轡-水色、杏葉-ピンク、鞍-だいだい、鐙-緑、雲珠-黄、鈴・飾金具-青、その他-白とした。馬具はその部位だけを見ている、理解されにくい資料であり、常に馬のどの部分に付けて使ったのかを意識してもらいたいという意図から、色分けを行ってみたのである。

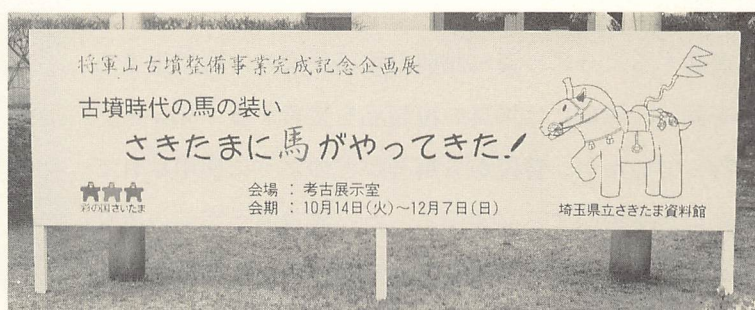
また、馬具の資料名は難しい漢字が並ぶことがあり、ルビをふっても敬遠されがちである。従って見出し的に、キャプション左上に《くつわ》とか《あぶみ》などと表示して、どの部位なのかを単純明快に示した。さらに、その資料が作られた時期についても、おおよそ記しておく（研究者によって製作時期については見解が異なるが）、馬具の変遷を知りたい人に対して情報を提示した。

それでは、企画展「古墳時代の馬の装い-さきたまに馬がやってきた！」の会場へ、ご案内いたします。

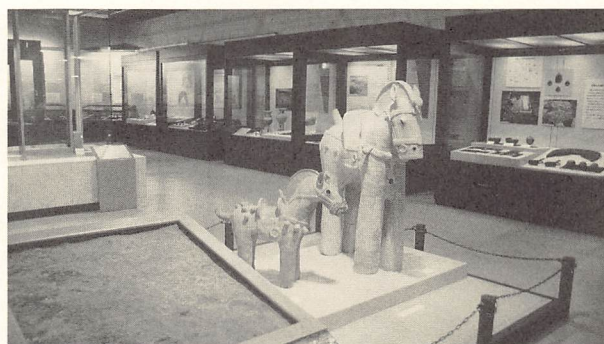
資料名見出し	製作時期
<p>《くつわ》 【6世紀前半】 だえんけいかがみいたつきくつわ</p> <p>楕円形鏡板付 轡</p>	
資料名	出土古墳・遺跡
<p>かも いなりやま 滋賀県高島町鴨稻荷山古墳 京都大学総合博物館 蔵</p>	
資料名	所蔵者
キャプションの一例	



県道入口看板



受付入口看板



展示室のようす

【序 日本に馬がやってきた！】

倭国に馬がやってきた！

— 其の地に牛・馬・虎・豹・羊・鶴無し —

いわゆる魏志倭人伝に記された、3世紀の倭（日本）のようすです。

考古学では、縄文・弥生時代の貝塚から馬の骨が出土することから、このころすでに馬がいたといわれてきました。しかし、最近では馬骨の科学分析の結果から、馬は古墳時代になって海を渡ってやってきた、という説が有力になっています。もちろん馬の飼育法や乗馬の技術を身につけた人々とともに。

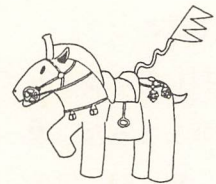
出土した馬の骨の復元から、当時の馬は今のサラブレッドよりも小さく、木曾馬や御崎馬などの在来馬と同じくらいだったと推定されています。

— おしえて！ バグジー君 — 日本にはいつ、馬がきたの？

こんにちは。ぼくのなまえはバグジー。みんな馬は好き？馬はいつから日本にいると思う？実は今から約1600年前、古墳時代になって、朝鮮半島というところから、わたってきたといわれているんだ。もちろん馬をかう

人たちといっしょにね。

馬って、力持ちで、足が早くて、おとなしくて……すごく役に立つ動物なんだよ。今の自動車っていったところかな。



考古展示室前のホワイエで、パネルのみの展示。当初は現代の馬具を展示し、流鏝馬や絵馬、絵巻物に登場する馬などの写真パネルを通して、現代から古墳時代へのタイムトンネル的なコーナーにしようと考えていた。しかし時間と手間の関係から、現代の馬装の写真と古墳時代の馬装の写真を並べたり、当時の馬に近い御崎馬の写真を掲示したりして、現代の馬と古墳時代の馬が二重写しになるような感じを出すようにした。

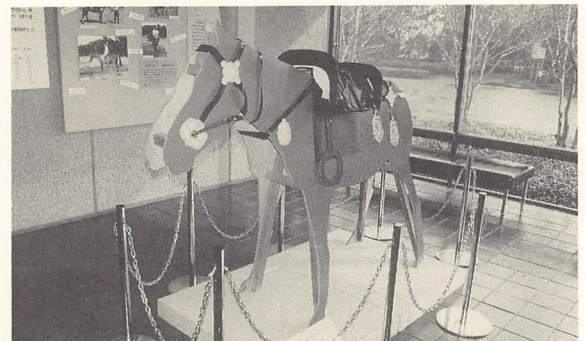
また、パネルのまわりには馬に関することわざをちりばめて、馬と日本人とのつきあいの深さを暗示し、馬への意識を高めていくような演出をめざした。

しかし、このホワイエの壁という場所が悪かった。パネルの前には馬の模型が設置してあり、馬の陰に隠れてしまうのである。また、パネル専用の照明がないものだから、天気の良い日や夕刻には、パネルが暗くて見にくくなってしまったのである。

後述するように、資料館前の移築民家の中庭で生きた馬を飼い、休日には馬具の複製品を装着する「ショー」を行っていたが、普段から馬具がどのように使用されていたのかを説明する必要があった。考古展示室前のホワイエに、木製の馬を設置し（通常は移築民家の馬小屋に住んでいた）、紙などで作った自前の馬具を装着させて、入館者にまず古墳時代の馬の姿を印象付けるようにした。片面には馬具のキャプションを付けず、もう片面にキャプションを付けて馬具の名称を覚えやすいような工夫を試してみた。



日本に馬がやってきた



馬具をつけた馬の模型

【1 さきたま古墳群出土の馬具 — 稲荷山古墳と将軍山古墳 —】

さきたま古墳群から出土した馬具 — 稲荷山と将軍山 —

埼玉古墳群の9基の大型古墳のうち、発掘調査で副葬品がわかっているのは、稲荷山古墳と将軍山古墳ですが、いずれの古墳からも華やかな馬具が出土しています。

まずはじっくりと、これらの馬具をみてください。

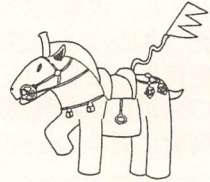
この馬具どうやって使ったの？
どんな馬につけてたの？
だれが馬を飼っていたの？
馬具にはどんな種類があるの？
馬具はどこでだれが作ったの？
私の住んでる町にも馬具はあったの？

疑問が次々わいてきませんか。

— おしえて！バグジー君— これ、なーに？

ここにあるのは、さきたま古墳群からみつかった、馬具というものだよ。馬具とは馬にのるためにつける道具のこと。古墳には、亡くなった人と一しょに、馬具をおさめることが多かったんだ。

いろんな形のものがあるだろ。どうやって使ったのかって？
とりあえず、これらの馬具のかがやきを目にやきつけてから、ゆっくり展示を見てってよ！



このコーナーをどこにもってくるか、悩むところであった。「V あなたの町にも馬がきた！」の中にも含めることもできたが、今回の企画展は将軍山古墳の整備事業が完成したことを記念して開催することから、埼玉古墳群から出土した馬具は、トピックス的に扱うのがよいと考えた。とくに稲荷山古墳の馬具は国宝に指定され、かつ一式すべて揃っていることから、馬具についてのガイドランス的な役割も持たせたかったのである。

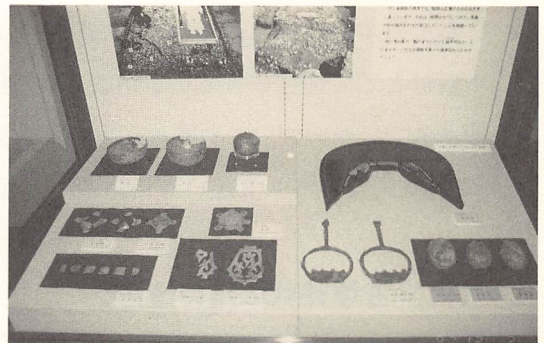
稲荷山古墳から出土した国宝の馬具は、すべて当館で保管していることもあって（所蔵は文化庁）、一式すべてを展示することができる。その利点を生かし、馬具の使用法が明確になるように、展示台上に馬形を切りぬいたフェルトを敷いて、轡は口に、杏葉はお尻にというように、使用されていた場所に並べて展示した。入館者からは、とてもわかりやすいとの評価を得た。

さて将軍山古墳の資料は、現在では当館の他に、東京大学や東京国立博物館、本庄市教育委員会などに収蔵保管されている。将軍山古墳の馬具を最も多く収蔵している東京国立博物館が、展示館改築のために貸出しを停止していることから、すべてを揃えることができなかったが、幸い、埼玉県立博物館に複製品が何点か収蔵されているので、それを借用させていただいた。

説明パネルは、少々強引な誘導尋問のようだと指摘もあった。



稲荷山古墳の馬具



将軍山古墳の馬具

【II 馬を飼う人々】

馬を飼う人々

馬がやってきたからには、馬を飼う人と牧場がなければなりません。

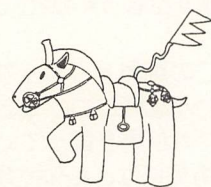
古墳時代の牧場については、文献による手がかりがなく、また発掘調査でも、馬を飼っていたと判断できるような遺跡にめぐりあうことは、非常に稀です。

しかし、大阪府の生駒山西麓では、馬の骨や馬形土製品などの遺物が、渡来系の遺物とともに豊富に出土したり、群馬県の白井遺跡群では馬の足跡が多数発見されるなど、古墳時代の馬の飼育に関する資料は増えつつあります。

—おしえて！バグジー君— だれが馬を飼っていたの？

古墳時代に、どこでだれが馬を飼っていたのかは、実はよくわからないんだ。でも大阪のある遺跡では、馬を飼っていた人たちが、いのりをささげていたと思われるあとが見つかっているんだよ。

この遺跡からは、朝鮮半島の土器と同じものが出土しているので、海をこえてやってきた人たちが、馬を飼っていたんだらうね。



ここで目を転じて、馬の文化を陰で支えていた、馬飼いの集団の人々の暮らしにふれてみた。大阪府四条畷市では、馬の骨や歯とともに、製塩土器や渡来系の土器、土製の馬形や人形などが出土する遺跡が多い。奈良井遺跡では、馬飼いにかかわる祭祀が行われたと思われる、方形の区画溝などが検出されている。

これらは、文献に表れる河内馬飼首の本拠地と考えられ、馬の飼育に渡来系の人々が深く関わったことを示す資料である。馬の頭骨の他、須恵器や渡来系土器、製塩土器（馬に与える塩を作る土器）、土製馬形・人形を展示した。また四条畷市教育委員会から借用した、奈良井遺跡の復元イラストパネルを掲示し、見学者の理解を促した。

群馬県の白井遺跡群では、火山灰の下から馬の蹄の跡が多数出土している。これは馬の放牧を示す資料として注目されているが、この蹄跡をはぎとったパネルが群馬県埋蔵文化財調査事業団に収蔵されていたので、これを借用した。展示室の入口正面に斜めに設置したが、物珍しさも手伝って、「これなんだろう？」という目で多くの人々の注意を惹いていた。



馬を飼う人々

【III 古墳時代の馬の造形】

古墳時代の馬の造形

弥生時代には、土器や銅鐸などに描かれた動物は鹿が多く、確実に馬を表現したものはありません。日本で馬の造形ものがあらわれるのは、輸入品を除いて5世紀以降ですが、それは馬具が広く普及するのと同じ時期にあたります。

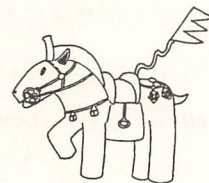
馬形の埴輪はあまりにも有名ですが、他に滑石製品、土器（須恵器）の飾り、冠の飾り、大刀の象嵌、古墳の壁画などに登場します。

身近な動物というよりも、「権力の象徴」として表現されることが多いようです。

—おしえて！バグジー君— 馬をあらわしたものは？

ほら、いろんなところに馬がいるよ。わかるかな？ 鏡や冠、土器、古墳の壁画……。おっと、ぼくの仲間、はにわ馬をわすれちゃいけないよ。

馬の「つよさ」や「美しさ」をあらわしたんだらうね。



次に馬を表現したものをいろいろ集めてみた。中国や朝鮮半島から輸入されたものとしては、神人車馬画像鏡（展示したものは中国出土）や馬形帯鉤、冠（国産との意見もあり）、国産品では馬形埴輪や装飾須恵器の飾り、滑石製馬形などを展示した。また江田船山古墳の大刀には銀象嵌の馬があり、九州地域を中心にした装飾古墳には馬が描かれることも多かったが、これらについては写真パネルで説明した。これらの造形物からは、当時の人々が馬に対して抱いていた考え方を垣間見ることができる。



古墳時代の馬の模型

馬形埴輪は、当館保管で国内でも最大級かと思われる行田市酒巻1号墳のものと、稲荷山古墳と通じる馬具を装着した、川本町舟山古墳の埴輪の2体にとどめた。普段馬具展となると馬具を付けた馬の姿を表す馬形埴輪が、主要な展示品となるのであるが、今回は生きた馬や馬の模型などもあり、あえて馬形埴輪には固執しなかった。しかし、最も親しみやすいものなので、展示室の入口からもよく見える場所に置いた。

埼玉県内でも地蔵塚古墳の壁画に馬が登場したり、滑石製の馬形が出土したりするが、これらは「V あなたの町にも馬がきた！」のコーナーに一括して展示した。

【IV 馬具のあれこれ】

今回の企画展で、メインとなるコーナー。さらに馬具の部位ごとに分けて展示した。それぞれ、「馬をあやつる・かざる－轡・杏葉」「馬に乗る－鞍・鐙」「ベルトを留める－雲珠・辻金具」「馬を鳴らす－鈴・飾金具」「馬を武装する－馬冑・馬甲・旗ざお」として、機能についても見出しにつけた。それぞれに一般向き説明パネルと「おしえて！バグジー君」パネルを掲げた。

なお、馬具はもともとセットで使用されたもの。轡だけとか、鞍だけでは役に立たないものであ

た。従って、馬具を展示する場合も、一式揃えるのが理想と言えるだろう。しかし、セットとして残っている馬具はそれほど多くはなく、一方では各機関とも馬具は古墳時代の展示資料として中心的な役割を果たしているの、セットとしてすべて借りることは難しいという現実がある。

よって、今回は馬具を部位別に分けて展示することにし、轡と杏葉以外はセット関係についてはほとんど触れなかった。しかし、資料はただ羅列するのはなく、部位別にどのように変遷し、どんな種類のものがあつたのか、という点を強調して展示した。

また、馬具の中で最も早く登場し、馬をあやつるための重要な部位として発達するのは轡であることから、轡を筆頭に展示するべきであったが、展示ケースの配置の関係で、鞍・鐙を最初に展示

馬具のあれこれ

馬具は乗馬の風習とともに伝えられたと考えられます。すでに北九州では4世紀後半の古墳に馬具が副葬され、近畿や関東でも5世紀前半の古墳から出土しています。当初は輸入品に頼っていましたが、5世紀後半には国産品が登場します。

6世紀は馬具生産の最盛期で、さまざまな種類のものが作られました。

馬具は当時の金工技術の粋を集めたものでその水準は驚くべき高さです。このように馬具製作によって培われた金工技術は、飛鳥時代の優れた仏教美術に受け継がれていきます。

ちなみに飛鳥寺の大仏を作ったのは「鞍作鳥（くらつくりのとり）」という人です。

せざるを得なかった。

これまで何度も強調しているように、それぞれの部位の馬具がどのように使用されたかがわかるように、複製品を馬に装着した写真や、「着せ替えバグジー君」と呼んだイラストを、執拗なほどに展示ケース背面に掲示し、常に使用法を念頭に置きながら展示を見てもらうように工夫した。

《馬に乗る一鞍・鐙》

鞍はスペースを使うので最小限にとどめることにした。鞍には、磯金具が鉄製のもの、鉄地金銅張りのもの、木だけでできているものがあり、それぞれの種類を1点ずつ展示した。なお障泥金具も鞍の仲間を含めた。

鐙は、初期の段階では木心鉄板張輪鐙が流行するが次第に廃れ、やがて壺鐙が登場して奈良時代に続いていく。今回は木心鉄板張輪鐙の最古格、七観古墳の鐙と、金銅製壺鐙の代表格、半兵衛奥古墳の鐙などを対比的に展示し、輪鐙と壺鐙の違いや、時期による変遷についての理解を促した。



鞍・鐙

—おしえて！バグジー君— くら

ぼくのせなかに着けるもの。みんなが馬にのるときにすわるんだよ。ほとんど木でつくられているんだけど、鉄などの金具も使われているから、その金属の部分だけがのこってることが多いんだ。



—おしえて！バグジー君— あぶみ

みんなが馬にのるときは、まずこのあぶみに足をかけて、くらにまたがるんだよ。そして、のってるあいだは、あぶみに足をのせてバランスをとるんだ。足をのせる部分が、輪になったものと、ふくろみたいになっているものがあるよ。



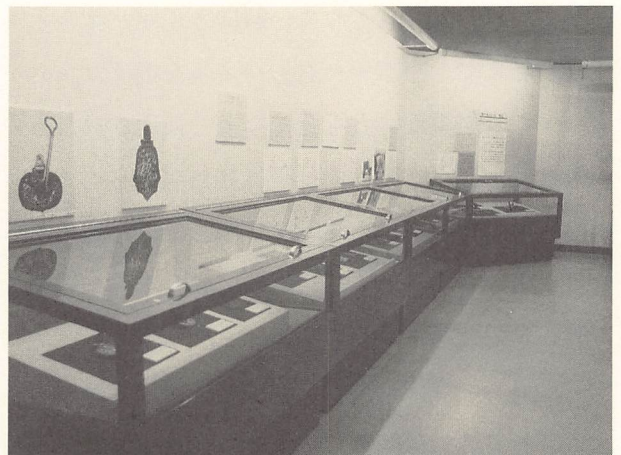
《馬をあやつる・かざる—轡・杏葉》

—おしえて！バグジー君— くつわ と ぎょうよう

「くつわ」は馬をあやつるために、口にくわえさせる道具だよ。くつわをおさえるために板がついているんだけど、これには金メッキをした銅をはったりして、華やかに飾ることが多いんだ。

「ぎょうよう」は、おしりの近くにぶらさげる飾りなんだけど、ほら、くつわの模様とよく似たものがあるだろ。

「くつわ」と「ぎょうよう」はとっても仲良しなんだね。



轡と杏葉

轡と杏葉はセット関係が強く、意匠が同じものも多いので、いっしょに展示することにした。さらにコーナーを次のように分け、それぞれに説明パネルを付した。

- ①初期の馬具にみる轡 ② f 字形鏡板付轡と剣菱形杏葉 ③鈴付鏡板付轡と鈴杏葉
 ④楕円形鏡板付轡と楕円形杏葉 ⑤鐘形鏡板付轡と鐘形杏葉
 ⑥ハート形鏡板付轡とハート形杏葉・棘葉形杏葉 ⑦花形鏡板付轡と花形杏葉
 ⑧鉄製S字棒状鏡板付轡

以上、轡と杏葉の種類はほぼ網羅しており、時期による移り変わりがわかるように配慮して、それぞれ最小限度の資料数で示した。また、①では4月ころに出土したばかりだった群馬県高崎市剣崎長瀬西遺跡出土の、関東で最古の轡の複製品や、⑥では平成6年度に出土した静岡市賤機山古墳の金銅装馬具を、関東では初めて展示することができたのは幸運であった。

《ベルトをとめるー雲珠・辻金具》

雲珠・辻金具には、環状のもの・板状のもの・鉢状のものがあり、これらも時期によって変遷していく。展示では大谷古墳の透彫りのある雲珠を中心にして、すべての種類の雲珠・辻金具が並ぶようにした。

《馬を鳴らす》

馬鈴や馬鐸の他、三環鈴、飾金具もこのコーナーに含めた。

ーおしえて！バグジー君ー うず・つじかなぐ

ぼくのおしりや頭には、馬具を固定するためにベルトがめぐらされているだろ。このベルトの交わる場所を、しっかりさせるための金具が、「うず」と「つじかなぐ」だ。

輪っかだけのか、きれいな透彫りがあるのか、こんもりあがったものとか…うず・つじかなぐだけでも、こんなに種類が多いんだね。



ーおしえて！バグジー君ー すず・ばたく

はにわ馬をみると、むねのところに「すず」や「ばたく」というベルをつけていることがあるよ。歩くところよい音をひびかせてくれるんだ。

この音をみんなに聞いてもらえないのがざんねんだな。



《馬を武装する》

ーおしえて！バグジー君ー うまかぶと・うまよろい

馬だって、戦争のときは武装するんだぞ。とはいっても、これは朝鮮半島や中国での話。日本では出土した例が少ないので、たぶん武装はしてなかったと思うよ。

よかった。だってこんな重いものつけられちゃ、たまらないよ！



ーおしえて！バグジー君ー うまのはたざお

この、「く」にゃく「にゃしたのはなんだ！これは、くらのうしろに取り付けて、旗をかかげるためのものなんだ。日本では出土した例が少ないけど、朝鮮半島の古墳の壁画には描かれているよ。これも戦争のときに使ったものらしい。

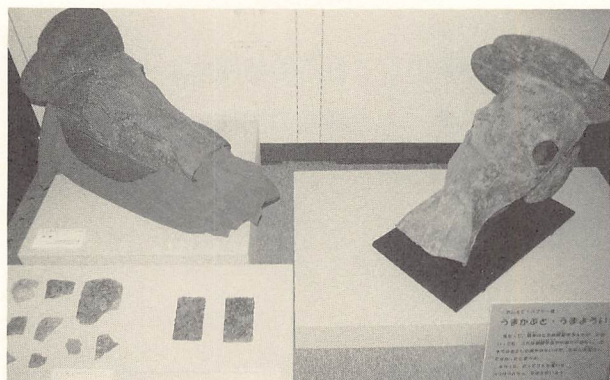
行田では、この旗ざおをつけた馬のはにわが出土して、話題になったね。



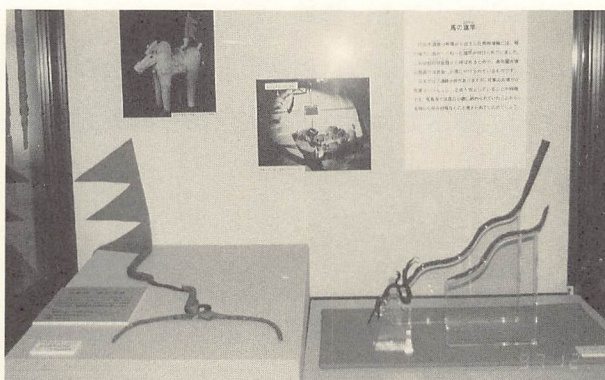
將軍山古墳から出土した、馬冑と鉄製の旗ざお（蛇行状鉄器）は、大陸や朝鮮半島とのつながりを直接示す重要な資料として、学界の注目を浴びているものである。これらをトピックス的に扱って、当館ならではのコーナーをめざした。

「馬冑と馬甲」では、將軍山古墳と大谷古墳（複製品）の馬冑を並列し、馬甲の小札といわれる滋賀県甲山古墳のものと、大谷古墳出土のもの（複製品）を展示した。馬冑は一見しただけで、その使用法がわかり、威圧感もあることから、人気コーナーになっていた。

「旗ざお」では、飛鳥寺から出土したものを借用し、將軍山古墳のものと並べて展示した。フェルトで旗の形をつくり、その使用法がわかるように工夫した。もちろん、酒巻14号墳出土の旗ざおを着けた馬形埴輪の写真パネルも掲示している。



馬冑と馬甲



蛇行状鉄器

【V あなたの町にも馬がきた！ - 埼玉県内出土の馬具 -】

あなたの町にも馬がきた！ - 埼玉県内出土の馬具大集合 -

埼玉県内で馬具が出土した遺跡は、現在行方不明のものも含めて58例が確認されています。

関東では、群馬県が約300例、栃木県が約100例、千葉県が約70例であるのと比べると埼玉県の出土数の少なさは際立っています。

馬具が出土した古墳や遺跡は、児玉郡や大里郡、そして埼玉古墳群のある北埼玉郡に多く分布しています。ただし秩父郡のように開発に伴う発掘調査が少ないところでは、未発見の馬具がたくさんある可能性があります。

県内では5世紀後半に馬具が登場し、6世紀にはさかんに副葬されます。それは主に前方後円墳や大型の円墳で、最も多く造られた小さな円墳には、あまり副葬されませんでした。それが、他県に比べて出土数が少ない理由です。

- おしえて！バグジー君 - さいたまの馬具

これまで、日本中の馬具をみてきたけど、いよいよ埼玉県の馬具をみてみよう。きみはどこにすんでるのかな。意外や意外すぐ近所の古墳からも馬具が出土しているのがわかったかな？

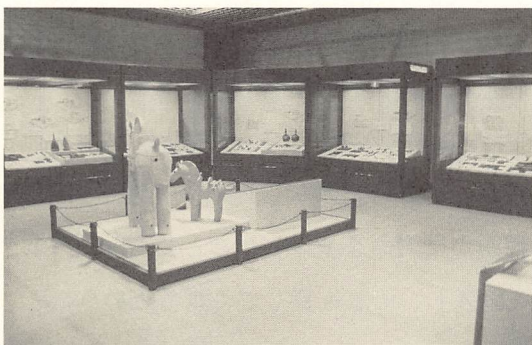
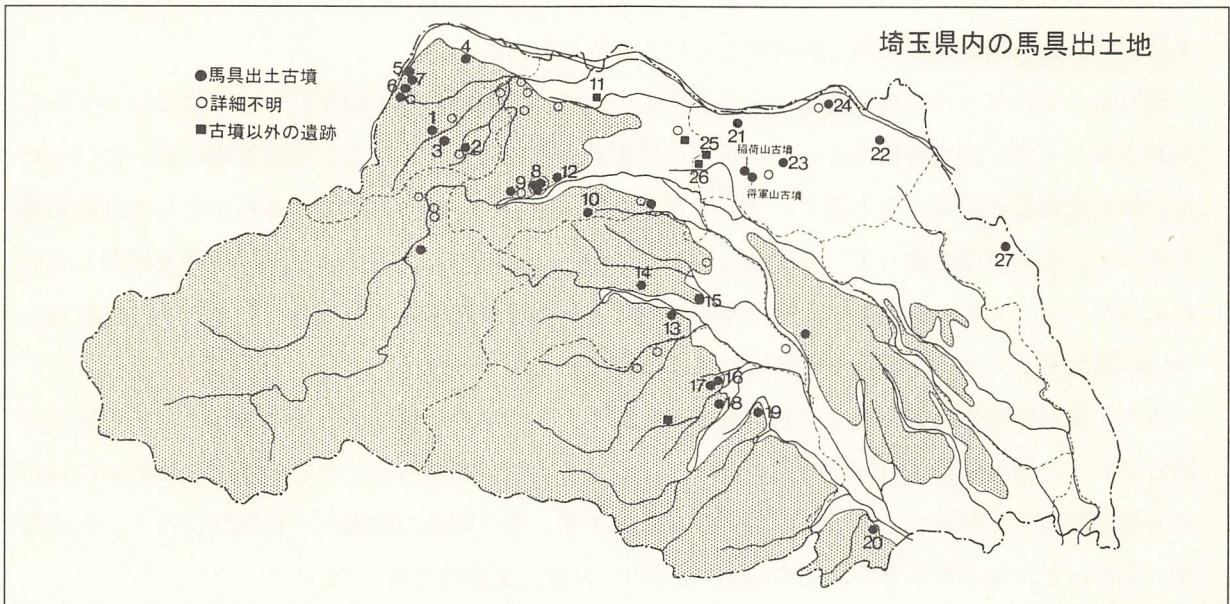
よし、うちに
かえったら、
その古墳を
見にいこう！



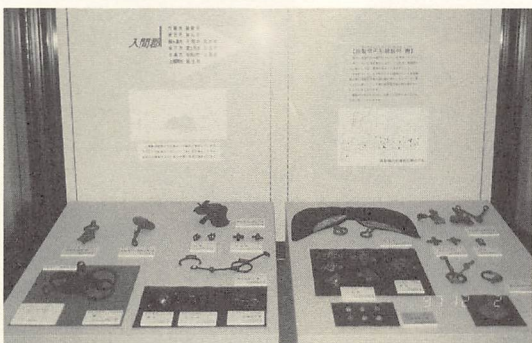
埼玉県の県立館である以上、やはり埼玉県について言及しないわけにはいかない。県内の馬具は58遺跡から出土しているが、現在行方不明のものも多い。群馬県の約300例や栃木県の約100例に比べると出土数は少ないが、さまざまな種類・形態のものがあって、ヴァリエティに富んでいるといえる。この企画展では、可能なものについてはすべて借用し、展示ケース内にぎっしりと並べた。県内の馬具資料を一同に集めた展示は、これが初めてである。

IVの「馬具のあれこれ」では、最小限の資料で当時の馬具のきらめきを強調してきたのであるが、Vでは反対に数を強調したかった。たしかに県内の馬具は、その華やかさでは見劣するが、自分の住んでいる町でも、こんなに馬具が出土しているということを知ってもらうことを第一に考えた。馬に関する祭祀や、地蔵塚古墳の馬の壁画の紹介に始まり、郡市ごとに馬具をまとめて展示した。従って、あらゆる部位の馬具が混在し雑然となることを恐れたが、キャプションの色分けによって混乱を免れたと言えよう。

一つ一つの馬具についての説明ができなかったが、埼玉県内の馬具で特徴的な鉄製楕円形鏡板付轡や、環状鏡板付轡については説明パネルを掲示した。



あなたの町にも馬がきた



県内出土の馬具

- | | | |
|-----------|-------------|------------|
| 1 伝長沖古墳群 | 2 伝広木 | 3 庚申塚古墳 |
| 4 御手長山古墳 | 5 伝中新里諏訪山古墳 | |
| 6 ニノ宮17号墳 | 7 南塚原26号墳 | 8 黒田古墳群 |
| 9 伝小前田古墳群 | 10 塩古墳Ⅲ18号墳 | |
| 11 東川端遺跡 | 12 見目1号墳 | 13 諏訪山1号墳 |
| 14 冑塚古墳 | 15 古凍14号墳 | 16 どうまん塚古墳 |
| 17 下小坂3号墳 | 18 牛塚古墳 | 19 伝仙波父塚古墳 |
| 20 一夜塚古墳 | 21 大稲荷2号墳 | 22 伝宮西塚古墳 |
| 23 鎧塚古墳 | 24 永明寺古墳 | 25 池守遺跡 |
| 26 小敷田遺跡 | 27 目沼9号墳 | |

—おしえて！バグジー君—
さあ、見おわったよ！

「さきたまに馬がやってきた！」の展示はどうだった？馬具ってちょっとわかりにくいけど、馬にどういうふうに着けてたのかを考えながら見ると、わくわくしてこない？

「さきたまの馬具」を最初に見たときは、チンブンカンブンだったかもしれないけど、展示を見おわってから、もう1回見ると……ほら、いちだんと輝いて見えるでしょ！



3 古代馬「代ちゃん」の登場

①代ちゃんが来るまで

馬具をテーマにした企画展を構想した段階から、生きた本物の馬に古墳時代の馬具の複製品を装着して、見学者に乗ってもらおう、という企画がもちあがっていた。しかし、現実的にはどこで馬を調達するか、馬に合うような馬具の複製品が作れるか、だれが馬の世話をするか……などの難問が多く、果たして実現できるのだろうか、という不安を学芸課のだれしもが抱いていた。

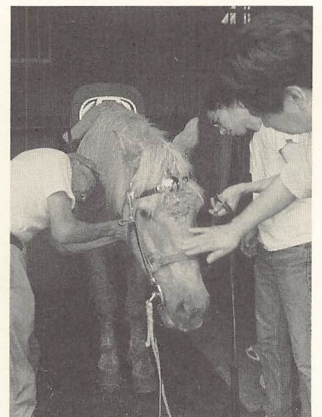
まず、どこで馬を借りるか。斎藤学芸課長が懇意にしている毛呂山町で、毎年行っている流鏝馬の馬を貸している、日高市の佐島牧場というところに問い合わせると、快く引き受けてもらえるとのこと。しかもイベントの度に馬を搬送するのでは、費用も時間もかかってしまうとのことで、1ヵ月の間、資料館で借りた馬を飼育するという事になった。

借りることになったのは、道産子の血を引くという、やや小振りの雄馬。かなり歳はいつているがおとなしくて、良い性格だという。馬具の複製品を作ることもあって、早速牧場に会いにいったが、体の毛が普通の馬よりも濃く、テレビなどでサラブレッドを見慣れている私にとっては違和感があった。体の寸法を測っている間も、別にいやがることもなく、静かに我々の行動を観察していたようだった。このとき撮影した馬の写真を見て、他の職員から「羊のようだ」と口々に言われ、ついに名前も「メリーちゃん」と呼ばれるようになってしまった。

さて、資料館で馬を飼育しなければならなくなったが、幸い資料館前の移築民家には馬小屋が付随していて、壁を修繕すれば十分馬を飼うことができる状況であった。ところが、職員の中にはだれも馬を飼育した経験のある者はいない。とりあえず、学芸課長が牧場へ一日体験に行くことになり、まあ何とかなるだろうと、この時期（5月頃）はまだ楽観的であった。

馬具の複製品の製作は、展示模型を作る業者に発注していた。当然、これまで本物の馬に付ける馬具は作ったことはない。何度も牧場に足を運びながら、「メリーちゃん」に合う馬具を悪戦苦闘しながらも製作してもらった。ほぼ完成に近付いたころ、思わぬ報せが飛び込んできた。

それは企画展の約1ヵ月前の、9月上旬であった。「メリーちゃんが死んだ」と佐島牧場から連絡があったのである。老衰死だった。青天の霹靂とはまさにこのこと。メリーちゃんの遺影の前では、沈鬱な空気が流れていたが、せめてもの慰めは彼が穏やかに天命を全うしたことであった。しかし、佐島牧場の御厚意によって、牧場が新たに別の馬を購入し、それを貸してくれるということ



ありし日のメリーちゃん

になり、ひとまずは胸を撫で下ろしたのであった。だが、馬がやってくるのは10月になってから。企画展の直前である。果たしてどんな馬なのか、馬具は合うのか……など新たな心配が生じてきたのであった。

馬は渡辺主査の命名により、古代馬の「代」と、メリーちゃんの代わりに来る馬ということから、「代ちゃん」となった。

10月上旬、馬は牧場にやってきた。一日牧場体験に行った学芸課長の報告では、毛並みのいい馬で性格もいいとのこと。資料館側の受け入れ準備も一応は完了し、あとは「代ちゃん」がさきたまに来るのを待つだけであった。

②さきたまに代ちゃんがやってきた！

10月10日、朝9時。ついに代ちゃんがさきたま資料館にやってきた。代ちゃんは、薄茶色の体（川原毛というらしい）に、足の先だけが黒い毛色をして、比較的がっしりとした肉付きであった。年齢は6歳ということで、メリーちゃんよりはかなり若いのは、体つきを見てもうなづける。

馬は臆病な動物。見知らぬ土地に着いた代ちゃんは、どうも落ち着きがない。中庭に設けた柵の中に入っても、目をうつろにしてウロウロしたり、柵に体をぶついたりしている。牧場の人の指導を受けながらえさをやったりして、その日の昼間は無事に過ぎていった。

その夜、代ちゃんを1頭残して帰るのも心配なので、学芸課長が移築民家に泊まり込んで番をすることになった。私も展示の準備のために資料館に残っていたが、10時半ころには帰宅した。12時過ぎ、さて寝ようという時に、

電話のベルが鳴った。渡辺主査から「代ちゃんが馬小屋から逃げた！」という。すでにアルコールが入っていたので、私は駆けつけることはできなかったが、無事に代ちゃんが捕まったかという心配と、これから1ヵ月間思いやられるとの不安で、なかなか眠りにつくことはできなかった。

翌日、資料館へ行くと代ちゃんは柵の中。ほっと一安心。課長に昨夜の顛末を聞いた。代ちゃんは馬小屋の入口に、3本降ろしてあった木の棒をへし折って、外に飛び出したらしい。物音におどろいて外に出た課長の前には、中庭を走り回る代ちゃんの姿が外灯に映しだされていた。移築民家2棟は生け垣に囲まれているので、その外に逃げださなかったのは幸いであった。古墳公園の中に逃げ込んだら……と考えると血の気が引く。課長は何とか止めようと、勇敢にも代ちゃんの前にはだかっただけだが、代ちゃんは走り抜けていった。そうこうしているうちに、代ちゃんも疲れたのか動きが鈍くなり、それを見計らって中庭の柵の中に追い込んだということである。動物を飼うことの難しさを感じた一件であった。



さきたまに代ちゃんがやってきた



あそこに代ちゃんが

③代ちゃんを飼う

そして代ちゃんの手世が始まった。原則的には職員全員で飼育にあたったが、とくに渡辺主査や乗馬クラブに通う庶務課の池田主事、発掘のアルバイトに来ていた飯塚、市川の両氏には、早朝から夕刻まで、公務の合間をぬってよく代ちゃんの手世をしてもらった（以下馬方4人組という）。

朝は6時半に出勤してもらい、代ちゃんの散歩、馬小屋の掃除で一日が始まった。そしてえさをやって朝の手世は終わり、昼は中庭の柵で放し飼い。時々ようすを見にいたり、汚物の片付けなどをする程度。ただし、小学生の団体があるときは、何かあると困るので、なるべく誰かが付いているようにした。「代ちゃん！」と呼びながら近付いてくる子供たちの笑顔を見ていると、飼育疲れもふっ飛んだという。

夕方に再び散歩、馬小屋のわら敷き、そして夕食。暗くなる頃には代ちゃんを馬小屋に入れ、初日のようなことのないように、ベニヤ板で入口をしっかりと閉めて、一日が終了した。この日課を約40日間。幸いなことに、代ちゃんも大きな病気をすることもなく、元気に牧場へ帰ることができた。馬方4人組はしばらくすると、すっかり代ちゃんと仲良しになり、散歩の時には裸馬のままでも乗りこなしてしまうほどになっていた。

その日によって馬の機嫌や調子も違い、また事故がないようにと気を使うので、体力だけでなく精神的にも相当消耗したのではないと思う。私は展示の方の疲れと、開催してからの虚脱感とで、あまり代ちゃんの手世に加わらなかったが、この企画が大成功をおさめたのも、馬方4人組のお陰と大変感謝している。



朝の光を受けて代ちゃんの散歩



馬小屋の掃除をする
増田庶務課長



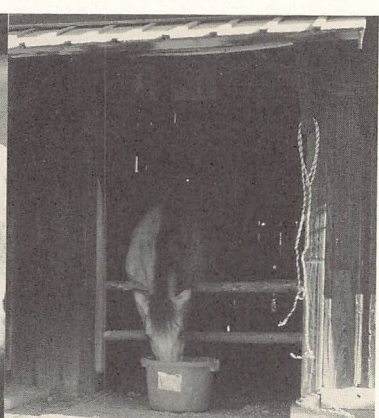
代ちゃんとはすっかり仲良し



飼葉とふすまを混ぜて
えさをつくる



週に一度はシャンプーできれいに
代ちゃんは気持ちよさそう



馬小屋でくつろぐ代ちゃん

④複製馬具の製作

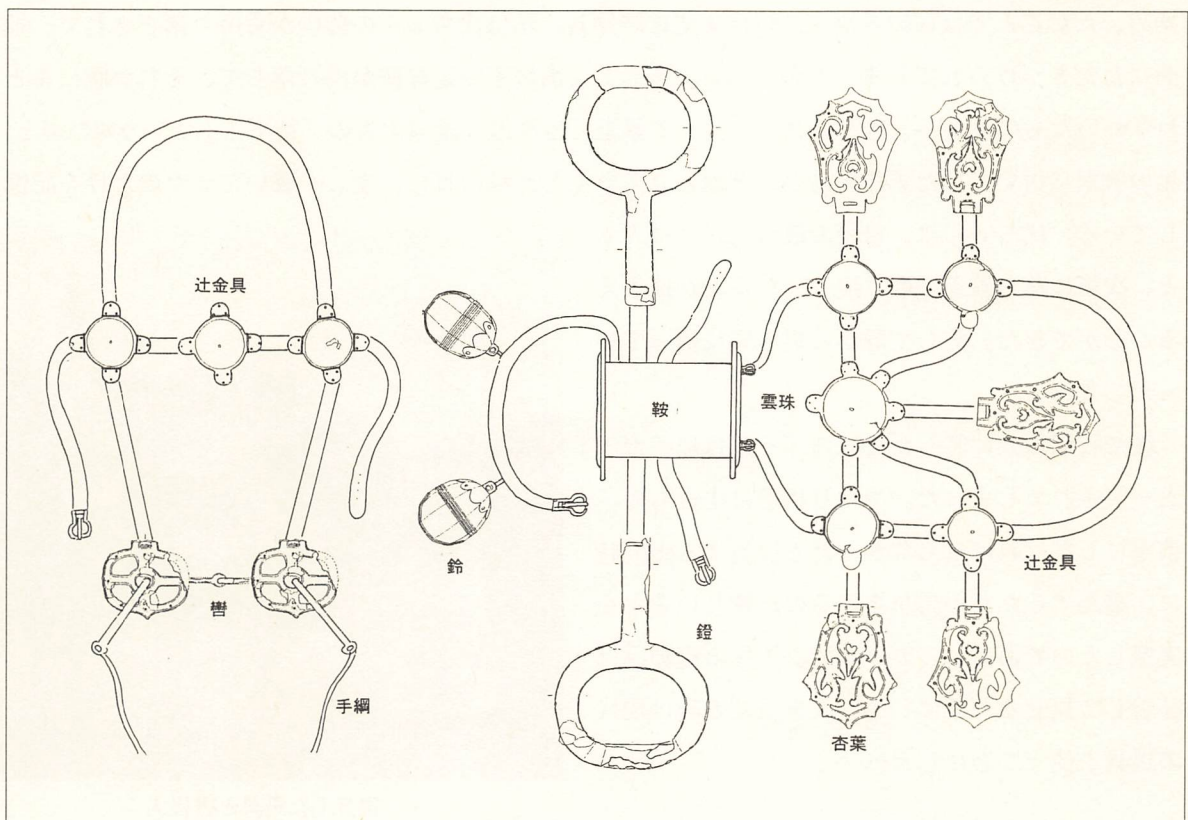
前述したように、代ちゃんを借りたのは、生きた馬に馬具の複製品を装着するためであった。これまで、馬の模型や剥製に装着して展示する例は何度も見てきたが、おそらく本物の馬に付けた例は初めてではないかと思う。それだけに今回の企画展では、これを大きな目玉としていた。

複製馬具のモデルは、将軍山古墳から出土した馬具である。その中でも金メッキを施した華やかなものを中心にしたセット関係を想定して製作した。当初はメリーちゃんに付けるように製作したことは、すでに述べた。代ちゃんはメリーちゃんよりも体格が良く、がっしりとしているので、果たして製作した複製馬具がうまく代ちゃんに合うかどうか不安であった。

同じ道産子系の馬ということで、骨格はあまり変わらないようであった。従って、頭絡については、ほとんど変更なし。最も心配だった（というか変更がきかない）轡もそのまま使用できた。轡は馬によって大きさが左右されないの、ある程度の規格が決まっていたことが推測される。胸繫や尻繫もベルトの長さを変えれば大丈夫であった。はじめからベルトは余裕をもって作れば問題なかろう。

最も苦勞したのは鞍である。将軍山古墳では磯金具の一部しか出土しておらず、鞍橋の大きさがわからなかったの、他の古墳から出土した鞍金具を参考に復元した。藤の木古墳のように装飾が華やかなものは、実用されたかどうか疑わしく思われたので、なるべく小さめの鞍や、明らかに実用品と言える木製鞍を参考に算出した寸法で製作した。結論から言えば、この寸法は小さすぎた。メリーちゃんではちょうどよかったのだが、代ちゃんの背中の上では不安定である。さらに鉄製の旗ざおを鞍に取り付けたものだから、なおさらである。

そもそも木で作った鞍というのは、馬の背中の上で非常に「すわり」が悪い。轡は現代に至るま



複製馬具模式図（馬具は1/10）

で基本的な構造が変わらないのに対して、鞍だけは大きく変化し、今では馬にフィットする革製の鞍が一般的である。この鞍でも馬が走行するとずれてしまうというくらいだから、木の鞍は甚だ使い勝手が悪い。おそらく古墳時代の人々も鞍を馬に固定することに、相当の苦心をしたのではないかと想像されるのである。

すなわち、鞍は馬よりも大きめに作らなければならなかった。鞍の下の敷物を厚くしていけば、ある程度の調節ができるからである。もちろん大きすぎれば、また安定感が悪くなるのは当然である。もっと多くのデータを集めて研究する余地があったと反省している。

鉄製の旗ざお（蛇行状鉄器）は、どのように装着したのかはわかっていない。構造的には鞍の内側、すなわち居木に旗ざおのU字形部分をはさむようにすれば、安定するのではないかと思われた。しかし、行田市酒巻14号墳の馬形埴輪では、旗ざおが鞍の外側で装着されていたので、今回はそれにならなかった。U字形金具の根元1カ所と先端2カ所に革紐を結び、それを鞍橋に開けた穴に通して固定させた。しかし馬が動くとき次第に結びが緩くなり、不安定になってくる。これを装着させて騎馬戦をしたことを考えると、もっとしっかりと固定させる方法があったのではないかと想定された。

さて、代ちゃんに合わせて完成した複製の馬具。これらを装着して、果たして人が乗れるだろうか。10月18日に「代ちゃんを迎える会」を開催し、子供たちに代ちゃんに試乗してもらおう予定だったので、前日にまず職員が乗ってみることにした。誰が……当然、馬具製作の担当であった私に白羽の矢が立った。代ちゃんがさきたまに来て1週間たち、かなり慣れてもきていたので、まわりの人々に大丈夫だからと励まされて、とうとう乗ることとなってしまった。古代の豪族よろしく、古代服と甲冑に身を包み、さっそうと代ちゃんにまたがった……。ところが、ただでさえ慣れない馬具を付けられ、突然重いものが背中に乗ったものだから、代ちゃんはびっくり仰天。次第に加速を始め、ただごとではないと悟った時はすでに時遅し。私は代ちゃんの背中から降り落とされて、地面にたたきつけられてしまったのである。そして、あの不安定な鞍が滑り落ちて、それが腹にまわりついたものだから、さらにびっくりして暴走。後を追う渡辺主査の「待て！」という叫び声と、馬の胸繫に付いていた馬鈴の音が、茫然と立ちつくした私の耳に、虚しく響いていたのだけを記憶している。代ちゃんは、普段の散歩コースに入ると、次第に落ち着きを取り戻し、なんとか捕まえることができた。そして静かに馬小屋に帰っていったのである。

後で牧場の人に話したところ「それは無茶だ！」と一笑されてしまった。やはり相手は生きもの。慎重にしなければならなかったと反省すると同時に、乗馬するための馬具を作るのが難しいことを実感したのである。この一件で、馬具の複製品は装着して見せるだけにして、人を乗せる時は現代の馬具を使うことにした。



復元した馬具と古代人

⑤イベント

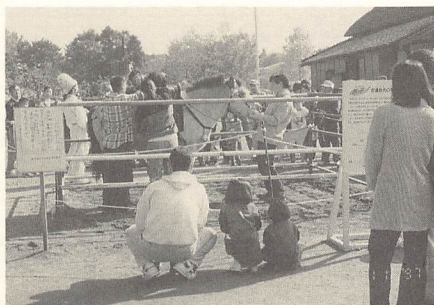
10月18日に「代ちゃんを迎える会」を渡辺主査の主導で開催した。集まった地元の小中学生、約150人に、馬や馬具についての話をしながら、代ちゃんに親しんでもらうようにした。人の多さにびっくりしたのか、あるいは前日の「落馬事件」があったからか、代ちゃんの機嫌が悪く、あいにく子供たちを乗せることはできなかったが、この日のために学芸課長が作った「さきたまの代ちゃん」という歌をみんなで合唱して、会は無事終了した。

休日及び第2・4土曜日には牧場の人にも来てもらって、代ちゃんに古墳時代の馬具の複製品を付ける「馬具付けショー」を、原則的に午前・午後1回ずつ開催した。移築民家中庭の柵内で、古代人に扮した学芸員が馬具の説明をしながら、一つ一つ装着していくという方法。牧場の人にも馬に乗る立場で馬具を語ってもらい、乗馬に素人の私には大変勉強になった。古墳時代の馬装が完成した代ちゃんには、観客から毎回盛大な拍手がおこっていた。

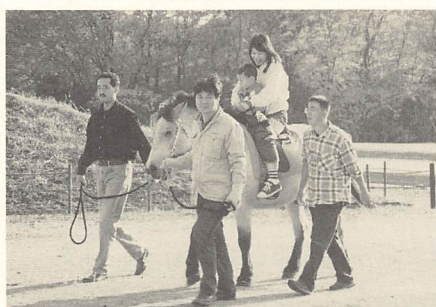
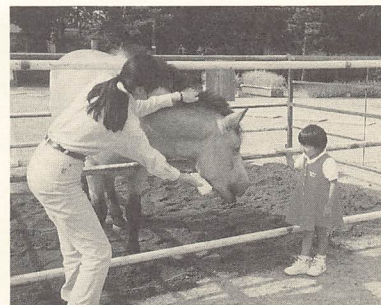
「馬具付けショー」のあとは、小学生以下に限って、代ちゃんの試乗会を行った。毎回25人限定としたが、いつもほぼ満員状態。乗っている子供たちの楽しそうな笑顔とは裏腹に、馬を曳く職員は何かあっては大変と緊張のしどおし。無事に終わると、ホーっとため息がこぼれるのであった。しかし、馬に（それもタダで）乗れることは滅多にないので、馬に親しんでもらう良い機会であったと思っている。



代ちゃんを迎える会に集まった子供たち



馬具付けショー



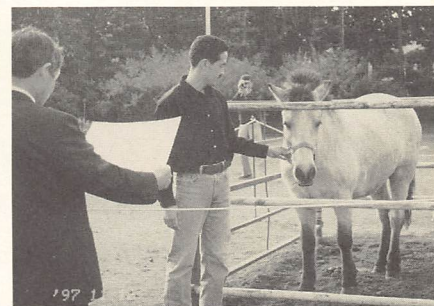
馬の試乗会



代ちゃんと記念撮影



期間中約600人の子供をのせた



代ちゃんを送る会では館長が感謝状を贈る

代ちゃんは約1カ月のさきたま滞在を終えて、11月16日、ついに牧場に帰る日がやってきた。この日、代ちゃんの労をねぎらう意味で「代ちゃんを送る会」を開いた。館長から感謝状と箱いっぱいのにんじんが贈られ、みんなで「さきたまの代ちゃん」を合唱。別れを惜しむ観客や職員を尻目に、代ちゃんは早々と搬送車に乗り込んでいった。きっと代ちゃんにとって、このさきたまの40日間のことは一生忘れられないだろう、と職員一同自分に言い聞かせながら、代ちゃんを飼育してきた苦労をかみしめていたのである。

この後、企画展最終日の12月6日には、再び代ちゃんが登場した。また、将軍山古墳展示館内に代ちゃんをモデルにしたブロンズ風の模型を設置し、複製馬具を装着して展示している。

代ちゃんに複製馬具を装着したり、子供たちに試乗してもらったりしたこれらのイベントは、あくまでも企画展の補助的な行事ではあったが、新聞やテレビニュースでも、代ちゃんの方に報道の重点が置かれる傾向にあったのは確かであった。それはそれで、話題性があってよかったと思っている。ある他館の職員曰く、「厩を貸して、母屋を取られる、っていうやつだな。」



さきたまの代ちゃん

作詞・作曲 斎藤修平



1. さきたまこゝろのこのうへにたにかわいいうまがあんて
 2. タイムマニンのこのさききたまにきまほしくなれかて
 3. よろこびにのこのさききたまにきまほしくなれかて

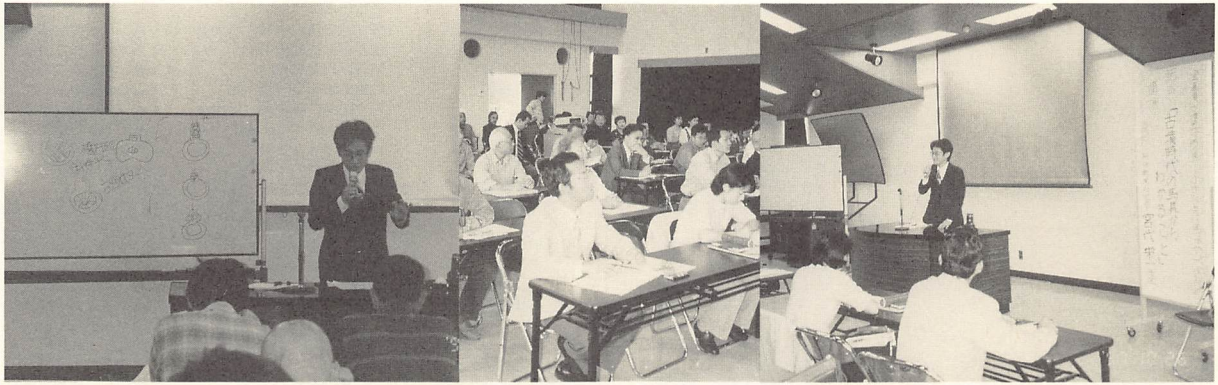
じこからきたのとたすねたたら
 みちゆくひにたすねたたら
 こだいのぼごこのさききたまにた
 うまがいなさいきたまにうみをわたってやうて
 おまかばりいなさいきたまにうみをわたってやうて
 こだいのぼごこのさききたまにた
 うまがいなさいきたまにうみをわたってやうて

やうてきたる
 わたしほし
 こだいの
 こだいのだいちゃん

5 記念講演会

10月26日(日)に、企画展の記念講演会を行った。講師は朝日新聞東京本社の学芸部記者で、日本考古学協会の宮代栄一氏。知る人ぞ知る馬具の研究者。馬具の各部位についてだけでなく、セット関係や馬具の使用法などにも論を展開して、学界の注目を浴びている若手研究者である。今回の企画展に際しても、氏の論文から多くのことを学び、展示の参考にさせていただいている。また図録の巻末には、私が聞き手となって、氏が語る「馬具論」を掲載している。

講演のテーマは「古墳時代の馬具からわかること」。当館の講堂には約80名の聴講者が集まり、スライドを交えて、約2時間の熱気あふれる講演会となった。馬具についての知識がない人にでもよくわかるような説明と、馬具の生産などについてのつっこんだ話が、バランスよく組み合わせられ、とても聞きごたえのある講演であった。



記念講演会風景

6 企画展を終わって

12月7日に企画展は終了した。その後は再び戦場のような忙しさ。展示ディスプレイの撤去と借用資料の搬出で、一段落した時はすでにクリスマスになっていた。その時になって初めて、この企画展はいったい何だったのかを考えることができた。

われわれ学芸員がやるべき企画展では、常に現代的な視点や課題を追究していかなければならないと考えている。歴史の研究とはそもそもそういうものであり、またそうでなければ単なる絵空事で済まされてしまうのである。考古学の展示にしても、ただ珍しい物や派手な物を集めただけの「お宝拝見的」な企画展であれば、別に考古学を専門に勉強してきた学芸員がやらなくてもよい。多くの自治体で博物館が造られ、さまざまな展示が行われるようになり、ポリシーがなく視点の定まらない企画は見向きもされない時代になってきたと言えるだろう。

今回、「人と馬とのつきあいの始まりの再現」というテーマから、逆説的に「現代では失われてしまった人と馬とのふれあい」を主張している。日本に馬がやってきたのが古墳時代。当時は貴重な動物として、また権威の象徴として人々から大切に扱われていたが、そうした人々の馬に対する考え方は、華麗な馬具や馬造形などの表現から垣間見ることができる。そしてつい最近まで、約1500年もの間、最も身近な動物として深い関わりをもってきた。

しかし戦後、自動車や農耕機械等が普及すると、次第に馬は日本人の生活から排除され、今では競馬場や乗馬クラブなど、特別な場所でしか見ることがなくなったのである。そして「効率化」の名のもとに、あらゆるものが機械化され、人と馬とのふれあいはおろか、人間同志のふれあいすら希薄になりつつある。博物館もその例外ではなく、ハイテクとやらを駆使した展示が花盛りとなり、最近ではやや食傷気味の感もある。今回、生きた馬「代ちゃん」を資料館で飼ったのも、このような現代の風潮へのささやかな反抗でもあった。期待どおり、子供たちは楽しそうに馬とふれあい、大人たちも懐かしがりながら、頭をなでていく。そこで家族の会話も生まれる……。そうした暖かな風景を数知れず見ることができたのも収穫だった。

さきたまに馬がやってきた！—このややくだけた言葉には、古墳時代のさきたまの人々が、初めて馬を見た時の感動が表現されているだけでなく、おそらく現代人の心の中に、まだ潜んでいるであろう馬に対する愛着感を喚起する意味が込められているのである。人間にとって大切なものを失わないために……。

展示品目録 (●国宝、◎重要文化財、○県指定文化財)

I さきたま古墳群から出土した馬具

1 ●稲荷山古墳出土品	文化庁 (埼玉県立さきたま資料館保管)
f 字形鏡板付書	1組
鈴杏葉	3点
鞍金具	一式
木心鉄板張壺鏡	1対
環状雲珠・辻金具	一式
組合式板状辻金具	一式
三環鈴	1点
2 将軍山古墳出土品	
ハート形鏡板付書	1点
棘葉形杏葉	1点
雲珠	1点
辻金具	数点
銅製鈴	1点
銅製鈴	1点
鞍金具	一式
金銅製金交具	1点
金交具	1点
飾金具	6点
高台付蓋付銅鏡	1点
銅鏡	1点
銅鏡	1点
棘葉形杏葉 (複製)	1点
辻金具 (複製)	1点
銅製鈴 (複製)	1点
輪鏡 (複製)	1対

II 馬を飼う人々

1 奈良井遺跡 (大阪府四条畷市) 出土品	四条畷市立歴史民俗資料館
馬頭骨	1点
韓式土器	1点
陶質土器	4点
製塩土器	4点
ミニチュア土器	4点
土製人形	5点
土製馬形	6点
滑石製白玉	一連
2 白井遺跡群 (群馬県子持村)	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
馬の足跡	一式

III 古墳時代の馬の造形

馬形埴輪	埼玉県舟山古墳出土	1点	埼玉県立博物館
	埼玉県酒巻1号墳出土	1点	埼玉県立さきたま資料館
馬形帯鉤	出土地不明	2点	(財)馬事文化財団馬の博物館
神人車馬画像鏡	中国出土	1点	(財)馬事文化財団馬の博物館
冠	茨城県三味塚古墳出土	1点	茨城県立歴史館
装飾須恵器	大阪府山畑22号墳出土	1点	東大阪市立郷土博物館
	大阪府夫木塚古墳出土	2点	東大阪市立郷土博物館
	三重県井田川茶臼山古墳出土	1点	三重県埋蔵文化財センター
陶製馬	兵庫県出石町出土	1点	京都大学総合博物館
滑石製馬形	群馬県長根羽田倉遺跡出土	8点	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

IV 馬具のあれこれ

1 馬をあやつる・かざる - 轡と杏葉			
轡 (複製)	群馬県駒崎長瀬西遺跡出土	1点	高崎市教育委員会
円形鏡板付書 (複製)	滋賀県新開1号墳出土	1点	滋賀県立安土城考古博物館
◎f 字形鏡板付書	和歌山県大谷古墳出土	1組	文化庁
◎劍菱形杏葉	和歌山県大谷古墳出土	3点	文化庁
f 字形鏡板付書	愛知県大須二子山古墳出土	1点	南山大学人類学博物館
劍菱形杏葉	愛知県大須二子山古墳出土	2点	南山大学人類学博物館
ハート形杏葉	愛知県大須二子山古墳出土	2点	南山大学人類学博物館
f 字形鏡板付書	三重県井田川茶臼山古墳出土	1組	三重県埋蔵文化財センター
劍菱形杏葉	三重県井田川茶臼山古墳出土	2組	三重県埋蔵文化財センター
鈴付楕円形鏡板付書	愛知県志段味大塚古墳出土	1組	京都大学総合博物館
鈴杏葉	愛知県志段味大塚古墳出土	1組	京都大学総合博物館
楕円形鏡板付書	滋賀県鴨荷山古墳出土	1点	京都大学総合博物館
楕円形杏葉	滋賀県鴨荷山古墳出土	1点	京都大学総合博物館
楕円形鏡板付書	三重県井田川茶臼山古墳出土	1組	三重県埋蔵文化財センター
楕円形杏葉	三重県井田川茶臼山古墳出土	2点	三重県埋蔵文化財センター
鐘形杏葉	大阪府山畑33号墳出土	3点	東大阪市立郷土博物館
ハート形鏡板付書	伝群馬県出土	1点	南山大学人類学博物館
◎ハート形鏡板付書	千葉県金鈴塚古墳出土	1組	木更津市教育委員会
◎ハート形杏葉	千葉県金鈴塚古墳出土	3点	木更津市教育委員会
ハート形鏡板付書	奈良県城山3号墳出土	1点	奈良国立博物館
ハート形杏葉	奈良県城山3号墳出土	1組	奈良国立博物館
ハート形鏡板付書	静岡県賤機山古墳出土	1組	静岡県教育委員会
棘葉形杏葉	静岡県賤機山古墳出土	1点	静岡県教育委員会
棘葉形杏葉	兵庫県田辺古墳出土	1点	京都大学総合博物館
◎ハート形杏葉	群馬県八幡観音塚古墳出土	4点	高崎市教育委員会
花形鏡板付書	栃木県下石橋愛宕塚古墳出土	1組	栃木県立博物館
花形杏葉	栃木県下石橋愛宕塚古墳出土	1組	栃木県立博物館
◎花形鏡板付書	千葉県金鈴塚古墳出土	1点	木更津市教育委員会
◎花形杏葉	千葉県金鈴塚古墳出土	2点	木更津市教育委員会
◎花形鏡板付書	群馬県八幡観音塚古墳出土	1組	高崎市教育委員会
花形杏葉 (複製)	群馬県八幡観音塚古墳出土	1点	高崎市教育委員会
◎鉄製S字棒状鏡板付書	静岡県半兵衛奥古墳出土	1点	静岡県立登呂博物館
2 馬に乗る - 鞍			
木製鞍	大阪府八尾南遺跡出土	1式	八尾市立歴史民俗資料館
鉄装鞍	大阪府御獅子塚古墳出土	一式	豊中市教育委員会
◎鉄地金銅装鞍	千葉県金鈴塚古墳出土	一式	木更津市教育委員会
◎革妥金具	群馬県八幡観音塚古墳出土	一式	高崎市教育委員会
障泥金具	栃木県下石橋愛宕塚古墳出土	一式	栃木県立博物館
3 馬に乗る - 轡			
木心鉄板張輪鏡	大阪府七観古墳出土	1対	京都大学総合博物館
木心鉄板張輪鏡	愛知県志段味大塚古墳出土	1対	京都大学総合博物館
木心鉄板張壺鏡	三重県井田川茶臼山古墳出土	1対	三重県埋蔵文化財センター
◎金銅製壺鏡	静岡県半兵衛奥古墳出土	1対	静岡県立登呂博物館
4 ベルトを留める - 雲珠・辻金具			
◎金銅製雲珠	和歌山県大谷古墳出土	1点	文化庁

雲珠・辻金具 (複製)	群馬県八幡観音塚古墳出土	2点	高崎市教育委員会
雲珠・辻金具	栃木県下石橋愛宕塚古墳出土	一式	栃木県立博物館
5 鈴			
鳴らす一鈴・馬鐸	三重県井田川茶臼山古墳出土	1点	三重県埋蔵文化財センター
三環鈴 (複製)	滋賀県新開1号墳出土	1点	滋賀県立安土城考古博物館
三環鈴	愛知県志段味大塚古墳出土	1点	京都大学総合博物館
三環鈴	伝長野県高松古墳出土	1点	埼玉県立博物館
三環鈴形埴輪	埼玉県新屋敷遺跡出土	1点	埼玉県立埋蔵文化財センター
馬鐸 (複製)	滋賀県新開1号墳出土	1点	滋賀県立安土城考古博物館
馬鐸	栃木県星の宮神社古墳出土	1点	栃木県教育委員会
◎馬鐸	千葉県金鈴塚古墳出土	3点	木更津市教育委員会
◎飾金具	千葉県金鈴塚古墳出土	一式	木更津市教育委員会
飾金具	静岡県賤機山古墳出土	1点	静岡県教育委員会
6 馬を武装する - 馬甲・蛇行状鉄器			
馬甲 (複製)	和歌山県大谷古墳出土	1点	(財)馬事文化財団馬の博物館
馬甲	埼玉県将軍山古墳出土	1点	埼玉県立さきたま資料館
馬甲 (複製)	和歌山県大谷古墳出土	一式	(財)馬事文化財団馬の博物館
馬甲	滋賀県甲山古墳出土	一式	野洲町教育委員会
蛇行状鉄器	奈良県飛鳥寺出土	1点	飛鳥資料館
蛇行状鉄器	埼玉県将軍山古墳	2点	埼玉県立博物館

V あなたの町にも馬がきた! - 埼玉県内出土の馬具 -

発見! 彩の国の古代馬			
熊谷市諏訪木遺跡出土	馬の頭骨	1点	熊谷市教育委員会
	木製鏡	1点	
	土器	3点	
本庄市西富田新田遺跡出土	祭祀土製品	一式	本庄市教育委員会
深谷市本郷東遺跡出土	石製模造品	一式	埼玉県埋蔵文化財センター
熊谷市西別府遺跡出土	石製模造品	一式	國学院大学日本文化研究所
深谷市割山埴輪遺跡出土	土製馬形	1点	深谷市教育委員会
埼玉県内出土の馬具 大集合!			
[児玉郡]			
児玉町伝長沖古墳群出土	楕円形鏡板付書	1点	埼玉県立博物館
	環状鏡板付書	1点	
	f 字形鏡板付書	1点	
	ハート形鏡板付書	1点	
	ハート形杏葉	2点	
	鏡	1対	
	雲珠	2点	
	辻金具	2点	
美里町伝広木出土	鈴付楕円形鏡板付書	一式	長瀬総合博物館
児玉町庚申塚古墳出土	雲珠	1点	児玉町教育委員会
	貝製飾金具	1点	
	辻金具	3点	
	組合式板状辻金具	3点	
本庄市御手長山古墳出土	帯飾金具	2点	本庄市教育委員会
	革妥金具	1点	
神川町ニノ宮17号墳	革妥金具	1点	神川町教育委員会
神川町南塚原26号墳	辻金具	3点	神川町教育委員会
[大里郡]			
花園町伝黒田古墳群出土	環状鏡板付書	1点	埼玉県立博物館
花園町黒田1号墳出土	環状鏡板付書	3点	花園町教育委員会
	鏡	1対	
花園町黒田4号墳出土	環状鏡板付書	1点	
	雲珠	3点	
江南町塩古墳群支群18号墳出土	雲珠	1点	江南町教育委員会
	辻金具	2点	
	革妥金具	2点	
川本町見目1号墳	鈴	2点	川本町教育委員会
深谷市東川端遺跡出土	馬鐸	1点	埼玉県埋蔵文化財センター
[比企郡]			
東松山市諏訪山1号墳出土	楕円形鏡板付書	2点	東松山市教育委員会
	板状辻金具	1点	
	金交具	1点	
東松山市青塚古墳出土	環状鏡板付書	1点	東松山市教育委員会
	ハート形杏葉	1点	
	鞍金具	一式	
	雲珠	1点	
	辻金具	5点	
東松山市古凍14号墳出土	半球形飾金具	3点	東松山市教育委員会
	環状鏡板付書	1対	
	壺鏡	1対	
	金交具		
	革妥金具		
	金銅製飾金具		
	帯飾金具		
[入間郡]			
川越市どうまん塚古墳出土	楕円形鏡板付書 (複製)	1点	埼玉県立博物館
	劍菱形杏葉 (複製)	1点	
川越市下小坂3号墳	楕円形鏡板付書	1点	(株)東洋クオリティワン
	辻金具	2点	
	金交具	2点	
川越市牛塚古墳	ハート形鏡板付書	1点	川越市立博物館
	雲珠	1点	
	辻金具	1点	
川越市伝仙波父塚古墳出土	環状鏡板付書	1点	川越市立博物館
川越市光山遺跡出土	雲珠	1点	埼玉県埋蔵文化財センター
[北足立郡]			
朝霞市一夜塚古墳出土	楕円形鏡板付書	1点	朝霞市教育委員会
	雲珠	1点	
[北埼玉郡]			
行田市大福高2号墳出土	楕円形鏡板付書	1点	埼玉県立さきたま資料館
加須市伝宮西塚古墳出土	鐘形鏡板付書	1点	御岳神社
	環状杏葉	2点	
	辻金具	4点	
行田市鐘塚古墳出土	劍菱形杏葉	1点	行田市教育委員会
	帯飾金具	一式	
	半球形飾金具	4点	
永明寺古墳出土	貝製雲珠	1点	永明寺
	鏡	1対	
[北高野郡]			
◎杉町目沼9号墳出土	鈴杏葉	3点	杉町町教育委員会